



みやぎの明治村 とよま資料館だより

《 警察資料館編 》 第3号

登米市歴史資料館・高倉勝子美術館
発行/㈱とよま振興公社
〒987-0702
宮城県登米市登米町寺池桜小路2
Tel: 0220-52-5566
Fax: 0220-52-2630



発行日 令和3年2月6日

警察とは？

犯罪・事件・事故・災害を未然に防ぐ役割を果たす行政機関です。そして警戒・査察を合わせた言葉です。



「違式註違條例(いしきかいじょうれい)」(版画錦絵)
報知新聞(484号)、東京日々新聞(832号)より(明治時代)

違式罪目

- 第14條 外国人を届け出しないで宿泊させる者。
- 第15條 外国人をこっそりと入り交じらせて同居させる。

違式註違條例は、明治初年における軽微な犯罪を取り締まる単行の刑罰法です。総則5条、違式罪目23条、註違罪目25条の53条からなります。明治6年(1873)7月19日の太政官布告により公布・施行。



註違罪目

- 第34條 他人の庭の木の果実を取って食う者。

「警察資料館 ひとくちメモ」

巡査は等外官吏という低い地位で給料も低く、官員となり改善されたのは明治24年でしたが依然と生活は苦しいものでした。

明治8年の巡査 1等・7円から4等・4円
 明治14年の警部(官員) 20円から50円
 巡査は 6円から10円
 ※明治20年代、大工・左官職人の収入は10円から20円程度。

《警察の歴史》

江戸時代には「町奉行所」という役所があり、行政・司法・警察 消防を司っていました。有名な『遠山金四郎』は、この町奉行です。

※仙台でも明治になると奉行所の跡に警察署が次々建てられました。

明治時代「邏卒」(らそつ)と呼ばれる巡査が設置され、川路瀧卒長がヨーロッパを視察し、フランスの警察制度を参考に警察制度を確立しました。邏卒のほとんどは士族(旧武士階級)で、読み書きの教育を受けていたこともあり、格闘・知識も高い水準で新たに教育するより都合がよかったことや逮捕の際には、刀剣・サーベルで戦うため、扱いに長けた士族が重宝されました。採用規則にあてはめ、学術試験・体格検査とかなり厳しいものでした。各府県では人材確保の為独自に規定を設けて、武士や町人から優秀な者を選んで採用しました。

明治16年、生計豊かな士族はわずか5%、生計ささしつかえない中等士族は11%、その日暮らしの下等士族70%(1か月の平均収入は4円、今の米価計算からすると2万円弱)、生活困難な当該士族は11%、上級武士は、政府の役人・巡査・教員になり、下級武士は官吏になれず農民になるしかありませんでした。

《登米町の警察》

明治5年7月登米町に水沢県庁が開庁。明治6年3月、九日町(現九日町57, 59番地付近)に登米警察本部が設置されました。

島山部長 署員25名。管轄は登米郡・本吉郡・気仙郡・東西磐井郡江刺郡・胆沢郡・栗原郡の7郡。

新警察署建築「登米警察署 庁舎」明治21年2月新庁舎着工。登米村寺池仲町12番地(現 中町3)敷地面積8畝4歩を760円で買取、設計は宮城県技手山添 喜三郎氏により建築費2,602円をもって建築にかかりました。同年9月署長官舎、構内に新築。登米署管内に12か所駐在所を置く。明治22年4月警察署庁舎完成。7月登米警察署の区域1町7村となる。

建築された場所は、中町と言って商人の住む繁華街です。登米は江戸時代より北上川の舟運で栄えたところで、石巻と一関の中継地点でした。2階のバルコニーからは船着場が見え、荷の積み下ろし人の出入りを監視していたのです。土手沿いには料亭が立ち並び、その賑わいを見に登米に泊まる人も多く、他町からこぞって登米に移住し、商売を始めたようです。

《明治時代の犯罪データより》

強盗・窃盗・追剥・スリやたぶらかし・殺し・傷害及び殺されかけた人・変死・自殺・捨て子・火災等々、度重なる自然災害もあったことから人々の生活は苦しく、犯罪も多岐にわたりました。

※登米警察署の留置場に入れられた人は、選挙違反が多かったと言われています。

《警察官が長い間なぜ嫌われものだったのか》

「オイコラ!」「人民どもが!」と住民を威圧した言葉を警察官は使っていました。人民から嫌われてうとんじられたのは、権力を誇示し、いたずらに人民を強要し威圧的な態度で接したことが大きな要因をなしていました。

当時の警察官は旧士族がほとんどで、何ごとにも信念を持って障害にも屈服しない強い意志の持ち主であったため、天皇の警察としての巡査であったことから、警察官になるということが、天皇に近づき、文武官僚として天皇の権威を高めると考えられました。

裏面もご覧ください

【 学芸員の視点・解説 】



伏見宮貞愛(さだなる)親王
(1858-1923)伏見宮家第22・24代



伊達寧裕氏
登米伊達家第14代

登米伊達家所蔵の一品

「皿の由来」

登米伊達家14代伊達寧裕は、慶応3年に生まれました。東京外国語学校(現 東京外国語大学)を卒業した後、明治14年外務省から清国留学を命じられ留学、明治17年には米国に留学します。

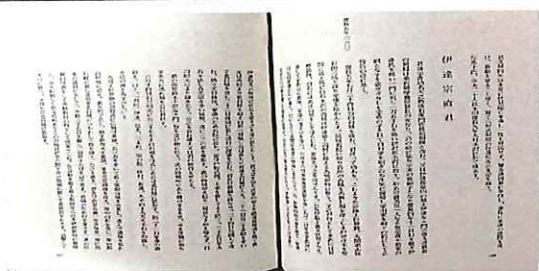
帰国後、第二師団に入り、第四旅団長の伏見宮貞愛親王殿下の直属通訳官として宮様のお側近くに仕えました。後、家庭の事情で帰郷しますが、帰郷にあたって、宮様から懐中時計、シャープペン、煙草盆、ご使用になられた箸などを下賜されました。この皿もその中のひとつで、大切に保管されたものです。



伊達寧裕氏
アメリカ留学時の
渡航証明書(パスポート)
専ら農業を修む傍から
家屋建築学を研究する。



伊達寧裕氏の
親王殿下通訳官の
辞令交付書



『登米藩史稿』～「登米町誌」第四巻資料より

登米伊達家代々を物語る資料

『登米藩史稿』の編纂

登米藩史稿は、登米伊達家の祖 白石若狭宗実君より歴代当主の伝記並びに治蹟が明治2年事実上の藩政の終焉まで編年体で書かれています。昭和3年頃、伊達寧裕氏を中心となり、登米の歴史と文化財に造詣の深い諸氏が編纂されました。文は漢字調の仮名交り体で、登米に遺された多数の書を参考とし基礎として書き上げられたものであり、内容は貴重な事実であると思われます。

〈 イベント情報 〉

1/23(土)～3/14(日)登米懐古館企画展
伊達宗倫没後350年記念
「宗倫と覚乗寺のキセキ」後期展示

次号の告知

次号は〈伝統芸能伝承館「森舞台」編〉で5月下旬発行予定です。登米町には、江戸時代から伝わる「登米能」を始め、伝統芸能が大切に受け継がれてきました。「森舞台」は、能、各種伝統芸能のための施設として、市民に公開され愛されています。

編集後記

警察資料館は建てられてから今年で132年となります。モダンでおしゃれな白ペンキの建物で、大変丈夫に出来ています。土台には石巻から取り寄せた「稲井石」、隙間を埋めたレンガ、大変強く長い木の柱、おしゃれな窓枠の上げ下げ窓、土壁に真っ白な漆喰壁、窓ガラスは明治の輸入品、びっくりするほど急な階段もその時代を感じさせます。

警察というお堅い役所だからこそのこだわりもあったでしょう。庶民がまだまだ着物を着ている時に、白亜の警察署で、洋服を着用し腰にはサーベルを指したお巡りさんが当たり前のように似合うのは、設計監督の山添 喜三郎氏も解って建てたのでしょうか。是非、来て観て体感して下さい。お待ちしております。

(中野 佐藤)

“みやぎの明治村”SNS 随時更新中です！
チェックしてみてください。

